

(研究会の記録)

[脇・心霊講座より]

「守護霊研究」事始め(1)

はじめに

人間には一人の例外もなく、先天的に「守護霊」といえる、客観的霊魂によって守護され、その上、その本人の将来(人生)は幸せの道を歩むことができるように指導されている。すなわち、この守護霊の働きによって、われわれの生活は絶対に不幸などに見舞われることなく、それどころか幸せの人生が展開しているというわけである。

これは事実として、人類文化史上においても認められ、草創期の歴史はそれに基づいているともいえる。

なお、この思想は、中世の哲学者の哲学的真観によって、具体化され強調すら試みることが行われてきた。たとえば、その例としては、プラトンとかアリストテレスのごときである。

しかし、上述の思想は、事実として認められていたとしても、その立証となると単なる観念的で哲学的思想に他ならないとされ、世上からは、あまり重要視あるいは実用視されず、思想としての範囲内のものとして取り扱われていたのであった。が、時代が進み、心霊科学の勃興と進歩発達に伴い、今日では、その理論と実際は、実験で裏付けられることにより事実であり、さらに人生はその上に立っているということを含め、人間の構成(組織)の研究結果から、この霊魂の働きこそが、われわれの日々の行動にかかわる重要な一要素であることが確認されるに至ったのである。

しかし、何といても物質万能主義(唯物的)が主流であるわが国では、この「霊魂」という五官には認められない存在については、見向きもしないというだけでなく、むしろ「迷信視」されてしまうという困った状況にあり、とくに守護霊問題に関しては、人間にとっての根本問題でもあり、もっとも慎重に取り扱わなければならないだけに、歯がゆい思いをしているわけである。

実を言えば、わが国は建国以来の伝統精神として「神ながらの道」という、民族的精神につちかわれ、本来、「神」といい、「霊」によって生存していることに目覚めていた民族であり国柄であった。言い換えれば、それらの精神は統体されて、「神霊によって守護されている」ことを自覚していた民族なのである。

これらの総和が、この守護霊思想でもある。氏神の思想、この氏神は、いわば、土地・建物・家族を守ってくれているが。さらに各自に守護霊として、その生まれた家の祖先の一人をその守護者たらしめる任命神であり、守護神に報告するなど一連の任にあたる「神」でもある。しかし、これらすべてのことは心霊科学に基づいてはじめて立証できることであるが、それにしても、こうした学問があり、方法論があることも知らない心霊家が今日においてもなお多いことには驚かされる。彼らは唯物的や宗教的な形而上学の観念にしばられたトンだ心霊家といえよう。神霊主義（スピリチュアリズム）を無視した人物である。

日本における守護霊の研究

さて、わが国において、この守護霊研究を靈魂研究の一分野として、永きにわたって、黙々として研鑽の歩を進めていた心霊研究家があった。その人物こそ、わが国伝統の古神道（今日の宗派神道ではない）ことに古典の上に立ってひたすら研究に献身された本会創立者浅野和三郎先生である。

先生は、感ずるところがあつて守護霊の研究に入られたといわれているが、当時（昭和6年のこと、「心霊科学研究会」創立以前よりその研究を手がけられ、すでに10年以上を費やしていた）はじめて大阪心霊科学協会の月次例会席上で、その研究の大要を発表されたのである。ここで、その冒頭の一節と、先生の生涯をかけた守護霊研究の概要を紹介したい。

「今回は守護霊問題について心霊学徒としての立場からいささか通俗的な講話を試みることに致します。もちろん今日では日本国民全般の心霊的水準線は頗る低く、とてもまだこれに向かって守護霊問題を提唱したところで理解を得られないことは明白な話で、うっかりすれば、ただ嘲笑をかうに過ぎないことは私としても先刻承知していないわけではありません。しかし、いたずらに世間の手前を気兼ねばかりしては、百年河清を待つと同じく、到底際限がありませんから、一般世間の方々にはしばらくご免蒙り、近頃次第に増加の傾向にある心霊熱心家諸氏を目標として、一気に死線を飛び越えることに覚悟を決めました。もし、一切の先入主をすてて、私の申し上げるところを仔細にお聴きくだされば、案外、それが有力な根拠の上に立脚しているところの議論であることが次第に首肯されると思います。」

この一節によっても、およそ先生の、気兼ね、その慎重さは、察せられるものがある。

言うまでもなく、海外においては、心霊研究が進むにつれ、心霊現象のいかようなるものかがハッキリされつつあり、次から次へと、その心霊現象は一つの例外もなく、その霊媒の守護霊を中心によって生起されていることが判明し、したがって守護霊研究は本質的に実験で裏付けされ正確なものとなってきたわけである。

守護霊の種類

ここで浅野先生のご研究の一部を紹介して行きたい。(注。編集部のご責任において、表現を最小限にとどめて修正しております。なお、現在においても、その内容については大きな修正を加える必要はないとされております。)

さて、私がここで使用する「守護霊」という言葉は、すこぶる概括的のもので、要するに、人間個々の背後に控え、大はその人の人格、生命、小はその人の吉凶禍福、または事業等の指導に当たるところの他界の居住者たちをひっくるめて指したものでありますが、詳しくその性質をしらべてみると、大体これを3種類の守護霊に分類、区別することが適當のようであります。

欧米の心霊学徒間には、そろそろこの3種類の守護霊たち(注。広義の「守護霊」あるいは「守護霊団を構成する霊魂たち」を指す)に対して特殊の呼称が決まりかけております。すなわち・・・

正守護霊(ガーディアン・エンジェルまたはガイド)

その人の全人格に対して、責任を有する先天的の守護霊で、バイブルの所謂ミニスタリング・エンジェルに当たります。

要するに、これが本当の守護霊です。(注。通常「守護霊」といえば「正守護霊」を指す)

支配霊(コントロール)

霊媒現象の作製はもとより、その他もろもろの仕事をする時、背後から指導の労をとる他界の居住者。守護霊より軽い立場。仕事の世話役を思えばよい。

補助霊

支配霊にとって、さらに補助の必要が生じた場合に、補助霊とよぶ靈魂を働かせる場合がある。

なお、細かに分類したら、以上の外にもまだ少しはあるかと思いますが、大体この3種類が主要なるものと思えば差し支えないようで、何れも善意をもって、生前死後の人間を保護してくれる、他界の居住者たちなのであります。したがって、それらの総称としてインヴィジブル・ヘルパー（目に見えざる保護者）などという用語が使われております。

一体この守護霊の観念は案外古いもので、おそらく人類の発生と起源を同じうし、同時にまた、全世界の何れの民族間にも、行き渡った観念でも有ります。むろん日本国民とてもその選に漏れず、守護神という言葉が、古来わが国に存在していたのは言うまでもなく、「何々神が自分の守り本尊である」の、「何々仏が自分のご加護をしてくれた」のということを、何人も平気で言っていたのであります。ただ19世紀において、唯物観念が流行しだしたことで、また新教派のキリスト教が輸入されたことで、はなはだしく日本人の頭脳から守護霊の観念を一掃することになりました。前者は物質をもって、すべての基点とするのであるから、無論超現象的の守護霊の存在を許しません。後者は天帝と自分との間、何者の介在をも認めないのであるから、これも当然守護霊の否定となります。浅薄空疎なる唯物説の取るに足らぬは勿論、新教徒の一神とても、相容れない考えであることはちょっと考えればすぐ判るはずであります。何となれば、大自然律の元締めであるべき天帝が、個々の人間から祈願された位のこと、ちょいちょいご自分の決めた法則を取り消したり、歪めたりするなどという事は、あまりにも幼稚至極な観念で、まさに神を冒瀆することになるからであります。が、悲しいかな、在来の守護霊の観念とても、一向茫漠たるもので、反対論者の逆襲に逢ったときに、これを撃退するだけの確乎たる資料が、一向集められていませんでした。つまりどっちもどっち、五分五分の水掛け論を闘わせていたわけで、これも人類発展の途上における一現象としてやむを得ない次第でしょう。

が、そうして幼稚不徹底な状態は、幸いにして近代心靈研究の発達につれて次第に掃蕩され、今日では、守護霊の存在を握りつぶすには、あまりにその資料が充実されてまいりました。

初期の催眠術と守護霊

つづけて浅野先生は、心霊研究の先駆けをなした催眠現象の術者の体験をつぎのように紹介されている。

ご承知の通り、欧米各国で、近代心霊研究の先駆けをなしたものは、デルーズその他によって開拓された催眠現象、または動物磁気現象であります。日本のお粗末な催眠術者たちは、もっぱら暗示現象にのみ捕えられ、全然その他の微妙な点に注意を払うことを怠りましたが、実は西洋では最初から被催眠術者の背後に、他界の居住者がいろいろ策動している実例が、数々現れていたのであります。現に親玉のデルーズが、ピロット博士に送った書簡の中に、つぎの一節があります。

「どうも現世を棄てた人たちの靈魂が、後に残せる親しき者に心を寄せ、その援助加勢のために出勤することがある事は、これを否定すべき何らの理由をも発見しえない。私は最近にそうした一つの実例に遭遇している。これがその梗概である……。」

そういつて彼は、被術者の亡父の靈魂が二度出現して、彼女の結婚問題につきて、忠告を与えたことを物語っております。(ピロット：動物磁気に関する通信、第3巻)

ピロット博士自身もまた、その催眠実験中に、大の驚くべき物品引き寄せ現象の起こったことを挙げております。すなわち、催眠中によく出現する「年若き処女」の靈魂が一つの薬草をもたらし、被術者の膝の上に載せて行ったという事実であります。

他にもそうした実例は、ちょいちょい起こったらしいが、当時の催眠療法家たちは、時期尚早という考えに捕えられ、なるべくこれを公開することを避けたい。かの有名催眠家のデュ・ポテア男爵などもその一人で、「幽明交通問題を論ずるには、20年ほど時期が早すぎる。一般世人にこれを理解するだけの心の準備が、まだできていない」と私信の中に言っています。その癖ご当人は、多年の実験中、幽明交通に関する幾多の確証を握り、どうあっても他界の存在者を認めないわけには行かない旨を、ステイントン・モーゼス(ロンドンの初期の大霊媒)に自白した事実があります。

シャンピニヨン博士も、その著「動物磁氣的生理、心理学」の第363頁にこのように述べております。

「最初の一患者はわれわれの質問に答える前に、必ず『或る人に相談した上

で』と述べる。そこで『その或る人というのは誰か』と訊くと、『それは私を指導してくださる天使です』と答える。それかあらぬか、催眠中の被術者は、覚醒時において到底発揮し得ないような、驚くべき能力、驚くべき知識を發揮する・・・』

リカード博士の「動物磁気論」の282頁には、こんな驚くべき事実が載せてあります。

「余と催眠中の被術者との間に、つぎの問答があった。

問『あなたは昨日述べたことを記憶しておりますか？』

答『記憶しております。』

問『あの不思議な人物は誰ですか？』

答『あれは私の守護霊です。・・・ちょっとお待ちください。私の守護霊が、ただいまあなたの守護霊と話をしております。』

問『なに、私の守護霊と話をしている！私の守護霊がそんなに近いところに居りますか？』

答『居りますとも！いつもあなたの傍について、いろいろ指図しているのですが、ただあなたの方で気がつかないでいる。』」

煩わしいから、他の実例は略しますが、以上の実例を見ただけでも、各人の背後にこれを守護するところの或る者が存在しているらしい事は、彷彿として見当がつけられると考えます。こうした立派な事実を握りつぶすべく努めた、多くの旧式な催眠術家の態度には酌量すべき点がないでもないが、とにかく余り褒められた態度だとは言い兼ねると思います。